

# 遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究

— 幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討 —

中坪 史典 上松由美子 朴 恩美 山元 隆春  
財満由美子 林 よしえ 松本 信吾 落合さゆり

## 1. はじめに

本研究の目的は、対象児（3歳女児：S児と表記）の遊びの様子をビデオカメラで撮影し、その映像データを用いた保育カンファレンス（保育者・研究者・大学院生の事例検討会）を通して、幼稚園での遊びに対する彼女の「夢中度」を探ることで、遊びの質を高めるための保育者の援助について検討することである。

「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である」（文部科学省 2008a）と言われるように、幼児期は、大人から知識や技能を一方的に教えられて身につけるのではなく、遊びを通して色々なことを学ぶ時期である。他方、幼児は、学ぶために遊んでいるのではない。幼児期の生活のほとんどが遊びによって占められていることから分かる通り（文部科学省 2008b）、幼児期の遊びは、学びの手段ではなく、むしろ目的であり、個々の幼児は、遊びの中で主体的な力を発揮し、能動的に対象とかかわることで、外界への好奇心や探求心を育んだり、物事を思考したり、想像力を発揮したりしながら、知識を蓄えるための基礎を培う。従って、幼稚園教育の重要な役割の一つは、幼児の遊びの質を高めることと言えるのではないだろうか。

ところで、私たちは、幼児の遊びの質の高／低をどのように捉えればよいであろうか。本研究では、Laevers (2005) が提示する幼児の「夢中度」に関する評価尺度（The Scale for Involvement）に注目するとともに（表1）、秋田・小田・芦田・鈴木・門田・野口・箕輪 (2009) が、Laevers (2005) の理念を日本の文脈に即して提示する「子どもたちのエピソードから始める自己評価法：実施の手引き」（以下「手引き」）を用いて保育カンファレンスを実施する。

Laevers (2005) によれば、保育過程の質を捉える上で、(1) 子どもの安心感や居場所感（「安心度」）、(2)

子どもの遊びへの集中や没頭（「夢中度」）、という2つの観点を探ることが大切であると言う。「安心度」とは、「家庭外の場所で、家族外の人たちと生活している状態を、子ども自身がどのように感じているのか」を見るものであり、「夢中度」とは、「子どもがどのくらい活動に没頭しているのか」を見るものである。特に、「夢中度」については、活動に対して子どもが没頭し、心を奪われ、全能力が向けられ、最大限の力を発揮しようとする状態のことであり、そこでの子どもの集中力は最高に達する。そのため、子どもの「夢中度」が高いと満足度も高く、達成感も大きいという（秋田・小田・芦田・鈴木・門田・野口・箕輪 2008, 2009）。

## 2. 研究の手順

本研究の実施にあたっては、上記の「手引き」を用いた。研究の手順は、次の通りである。

1) [ビデオ・フィールドワーク]：研究者と大学院生（中坪・朴）は、午前中の自由遊びの時間に、S児の様子をビデオカメラで撮影するとともに、フィールドノートに記録した。

2) [エピソードの抽出]：大学院生（朴）は、記録された映像データやフィールドノートをもとに、「手引き」に示されるForm Aを用いて、その日の観察場面におけるS児の遊びのエピソードを一つ抽出し、記述するとともに（A4用紙1枚）、彼女の「安心度」「夢中度」を評定した。

3) [保育カンファレンス]：その日の保育終了後、保育者・研究者・大学院生（共同研究者全員）で保育カンファレンスを実施した（写真1）。最初に、上記のForm Aを検討するとともに、そこに記されたエピソードに該当する映像データ（S児の様子）の視聴を通して、S児の遊びの「夢中度」の高／低について議論した。次に、「手引き」に示されるForm Bを用いて、

---

Fuminori Nakatsubo, Yumiko Uematsu, Eunmi Park, Takaharu Yamamoto, Yumiko Zaima, Yoshie Hayashi, Shingo Matsumoto, Sayuri Ochiai: A Study on the Teachers' Support for Improving the Quality of Young Children's Play -Focus on the Involvement of Young Children.

議論の焦点化を図った。具体的には、(1) S児の遊びの「夢中度」が高い／低いと判断した理由、(2) 彼女の遊びの「夢中度」がより高くなるための視点、の2点について「豊かな環境」「集団の雰囲気」「自発性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり方」「子どもとその背景」「特別な事情」の7つの観点から検討した。

4) [より良い明日の保育のために]：保育カンファレンス終了後、保育者（上松）と大学院生（朴）は、「手引き」に示されるForm Cを用いて検討した。また、保育者（上松）を中心に、「手引き」に示されるForm Dを用いて、S児の「夢中度」がより高くなるための援助の在り方について検討した。

表1 幼児の「夢中度」の尺度 (Laevers 2005)

THE SCALE FOR INVOLVEMENT [夢中度の5の段階]	
1	非常に低い 子どもは、ほとんど何も活動していない ●集中力がない状態（きょろきょろ見る・うとうとするなど） ●感情がない 受身の態度である ●目的のない行動 生産的な動きをしていない ●探究心や興味 関心が見られない ●何も自分の中に取り入れようとしていない
2	低い 子どもは、ある程度の活動はしているが、それがしばしば中断する ●集中力が限られている（活動中に目が離れる ぼんやりする） ●簡単に気が散ってしまう ●単純な結果しか引き起こさない行動をする
3	普通 子どもは、いつも忙しそうにしているが、本来の集中力は欠けている ●決まりきった行動、表面的な注意力しかはたしていない ●活動に夢中になっていない 活動が長続きしない ●限られたモチベーション 本来の集中力が低い 挑戦する意欲がない ●子どもは、深いレベルでの経験を得ていない ●子どもの能力を十分に発揮していない ●その活動は、その子どもの想像力を刺激していない
4	高い 子どもは、明らかに活動に夢中になっているが、常に精一杯取り組んでいるというわけではない ●子どもは、中断することなくその活動に取り組んでいる ●ほとんどの時間、本来の集中力が見られるが、ちょっとした瞬間に注意力が表面的になる ●挑戦する意欲があり、ある程度のモチベーションが見られる ●子どものある程度の能力や想像力が、活動の中で扱われている
5	非常に高い 観察中、子どもは絶えず活動に夢中になっており、完全に没頭している ●完全に集中している 中断することなく焦点を定めている ●高いモチベーション その活動に強い興味を持っている 辛抱強い ●何か邪魔が入っても、気を散らすことがない状態 ●敏感である 細部にも注意を払っている 几帳面に活動している ●知的精神的活動であり、経験が豊かである ●子どもは、絶えず全力を尽くしている（想像力や精神的能力を最大限に働かせている） ●明らかにその活動に夢中になることを楽しんでいる



(写真1) 保育カンファレンスの様子

以上、4段階の過程を一つのサイクルと位置付け、これを3回実施した（第1回：2009年12月3日～、第2回：2009年12月17日～、第3回：2010年1月21日～）。尚、以下では、第3回（2010年1月21日）を除

く計2回のサイクルを分析対象とし、各回の検討内容を整理するとともに、そこで見出されたS児の遊びの質を高めるための保育者の援助について考察する。

### 3. 研究対象児の概要

S児は、両親と弟との4人家族で、2009年4月より本園で初めて同年代の幼児と集団生活を送っている。月齢は低く（平成18年2月生まれ）、体格も小柄で、一見おとなしい印象を受ける。しかし、S児は、入園式当日から自分の椅子に座ることができずに歩き回っていた。入園式終了後、母親は「じっとすることができないので、心配しています」と伝えて帰られた。また、家庭訪問でも、母親とのコミュニケーションがうまく回っていないことや、落ち着きがないことなどを話された。登降園時の送迎の際にも、母親が一方的に話しかける姿が印象的で、それに対してS児は、あまり反応を示すことがなかった。

4～5月のS児は、何をやるにもほとんど表情を変えることがなかったが、保育者の動きはよく見ており、気がつくとも傍にきて、保育者のすることを真似て遊ぶことが多かった。そして、S児は次第に、保育者との一対一のかかわりの中では、笑顔を見せるようになっていった。しかし、その他の遊びや集いの中では、緊張した表情を見せ、「安心度」は低いことが伺えた。遊びにおいては、自分が興味・関心をもったことにはかかわっていくものの、すぐに次の遊びに関心が移ることも多く、短時間で遊びの場が変わっていった。目の前のことに向かいながらも、常にS児の目は動いており、周りの様子が気になっている様子が見られた。このような姿から、入園当初のS児の遊びへの「夢中度」は低いことが伺えた。また、S児の振る舞いはときに乱暴で、ウサギの両耳をつかんで引っ張ったり、水をかけたりするなどの姿も見られた。

その後、S児は、保育者とのつながりを拠り所にしなが、少しずつありのままの自分が出せるようになってきた。友だちのことを意識するようになり、夏休み前頃は、友だちと一緒に遊びたいという思いも高まっていった。気の合う友だちもできて、3～4人で一緒に遊ぶことも増えていった。しかし、10月半ば頃より、友だちに押され気味のことも多くなり、自分がしようとすることを拒否されると何も言えずに従ったり、友だちが指示することを黙って聞いたりするなど、友だちの言うとおりに動く姿が目立つようになっていった。このように、S児の「安心度」は、入園当初に比べると高まってきているが、「夢中度」においては、友だちといることで一見、楽しく遊んでいるように見えるものの、自分のしたいことに夢中になっているか

という点で、疑問を感じるものであった。

そこで、現在のS児理解を捉え直し、S児が遊びに没頭し、その中で満足感や充実感を味わえるような保育者の支援を考えるために、研究対象児に設定した(広島大学附属幼稚園 2009) (写真2)。



(写真2) S児と保育者

#### 4. S児の遊びの質を高める援助の検討 (第1回)

以下、既述した4段階のサイクルの第1回目の実施状況を紹介します。

##### 4.1. S児の遊びのエピソードと「夢中度」

以下は、下記期日の映像データやフィールドノートをもとにした、Form Aに記されたS児の遊びのエピソードの抜粋、及び彼女の「夢中度」の評定である。

##### 【エピソード1】「木に登る」(夢中度：3)

【2009年12月3日(木)】

ターザンロープで遊ぶために並んでいたA児が、隣にある木に登り始めると、S児も同じように木に登ろうとする。A児は少し上の方まで登ることができたが、S児はなかなか登れない様子である(写真3)。その後、S児は木から降りて、別のところへ行こうとしたが、今度は保育者が木に登ろうとしたため、すぐに戻ってくる。保育者が木に登り、その後ろをA児が登り始める。その後ろをS児が登ろうとする。しばらくして、A児が降りようとしたとき、下にいるS児の手を誤って踏んでしまったため、S児は泣き出す。A児は木から降りて「ごめんね」と言い、S児の涙を拭きながら慰める。保育者がS児に痛いところを確かめて、その箇所をさすりながら「大丈夫?」と尋ねると、S児にうなずく。その後、S児はまた、木に登ろうとする。

##### 4.2. S児の「夢中度」を高めるための課題

体格が小柄なこともあり、クラスの中でS児は、友

だちに年下に接するような対応をされることがある。また、S児自身も友だちに頼って遊びを進めていくことが多かった。S児は特に、A児との仲間関係を深めており、S児にとってA児は、リーダー的で憧れの存在になっていた。保育者は、S児は自分の思いを色々な方法で表現でき、行動力があるA児に魅力を感じているかもしれないと捉えている。このことから考えると、彼女自身(S児)が何をして遊ぼうか、どうすれば良いのかと迷う時に、保育者の次に信頼できるA児と一緒にいながら同じ遊びをすることで(A児について木登りをする)、安心感をもち、遊びへの楽しさも味わっているかもしれない。S児が憧れの友だちとの遊びの中で、同じ行動をしながら楽しみを感じていくために、幼児同士の仲間づくりができるような援助を行うことが、遊びの「夢中度」を高めることに繋がると考えられる。彼女にとって、そうすることが遊びへの刺激や動機づけになることを期待する。

他方で、自分がやりたいという思いを自発的に出すことも大切である。仲良しの友だちとの関係の中で、自分の思いや能力に応じた活動に取り組むことは、幼児の遊びの「夢中度」に大きな影響を与えるだろう。そのために、遊びへの意欲を発揮できるように、保育者は、まずS児が何に興味をもっているか、何を楽しんでいるのかを敏感に感じ取って、適切にかかわっていく必要があるだろう。その際、保育者同士の役割(チーム保育)がきちんと相談されていると、集団の中でも一人ひとりの個性に応じた、より効果的な保育になるのではないだろうか。



(写真3) A児の後ろから木に登ろうとするS児

##### 4.3. S児理解の再構成と援助の工夫・改善

9月以降、S児はA児を含む3~4名の女児と遊ぶことが多く、傍から見ても楽しそうに見えた。保育者は、そのようなS児の姿から、友だちとのかかわりの中で遊びを楽しんでいると読み取り、夏休み前のよう

なS児との一対一のかかわりをもつことがなくなっていた。しかし、S児が気の合うA児たちとばかり遊ぶことが続いてくると、次第に、A児に引っ張られるだけのS児の姿が気になり始めた。今回、S児の遊びのエピソードの抽出と保育カンファレンスを行って気付いたことは、S児自身の中にこだわりややりたいことが生まれていないのではないかということである。そのため、周りの友だちのやることに気がそれて、友だちと同じ場に一緒にはいるが、S児らしさが発揮できずに友だちの後追いで同じことをしたり、受身的に行ったりしている状況になっているのではないかと保育者は感じた。

以上のようなS児理解の再構成に伴い、保育者は、今後S児の「夢中度」を高めるためには、S児が「自分がやりたい」という思いをもって遊びに取り組み、その中で自分らしさを出していくために、以下の二つの援助の工夫や改善点を考えた。

第一は、保育者がS児の好きな遊びや楽しんでいることに目を向け、S児がやりたいことに自ら向かえるように環境づくりや援助をすることである。その際、S児と一緒に遊ぶ中で、保育者自身が楽しさや遊びの面白さに共感することを心がけることとした。

第二は、S児の遊びの状況をよく見ないで声をかけたり、遊びの提案をしたりするのではなく、遊びの中のつぶやきや表情、動きからS児の思っていること、してほしいことなどをよく聴き、それをもとに保育者の思ったことや感じたことを素直に返していくというかかわりをもつことである。そうすることで、S児も自分の思いを素直に保育者に伝えることが増え、そのような保育者とのやりとりの積み重ねが、今後、友だちとのかかわりの中でS児らしさを発揮していくことにつながるのではないかと考えたためである。

## 5. S児の遊びの質を高める援助の検討（第2回）

以下、既述した4段階のサイクルの第2回目の実施状況を紹介する。

### 5.1. S児の遊びのエピソードと「夢中度」

以下は、下記期日の映像データやフィールドノートをもとにした、Form Aに記されたS児の遊びのエピソードの抜粋、及び彼女の「夢中度」の評定である。

#### 【エピソード2】「ハンドベルで遊ぶ」（夢中度：3+） [2009年12月17日]

保育室には、クリスマスの音楽が流れている。S児は、A児など4人の女児と一緒に、好きな衣装を着て音楽に合わせて部屋を回っている。その後、A児が女

児たちにハンドベルを渡し、保育室の中心に並ぶようにリードする。女児たちは、みんなで舞台上に立っているようなイメージで、ハンドベルを振りながら楽しんでいる。S児も自分の体を動かしながら、音楽に合わせてハンドベルを上下に振っている。

しばらくして、A児がカゴの中から鈴をとって、S児に渡す。S児は拒否することなく、鈴を左手に、ハンドベルを右手に持って遊んでいる。A児はS児のハンドベルの振り方が気になったのか、もっと下で振るように、S児の腕をつかんで下に下ろさせる。ハンドベルや鈴を振る様子から、S児はある程度楽しく遊んでいるように見える（写真4）。



（写真4）ハンドベルで遊ぶS児と女児たち

### 5.2. S児の「夢中度」を高めるための課題

S児は、A児や他の女児たちと音楽に合わせて楽しく身体を動かしながら遊んでいた。遊びに対する動機は、ある程度高いと判断したものの、他児の動きを気にしたり、笑顔があまり見られなかったりと、遊びに没頭した様子があまり見られなかったため、遊びへの「夢中度」は3+であると評価した。

S児の背景、前回のエピソードとの関連、保育カンファレンスにおける議論を総合してみると、S児の遊びへの「夢中度」を高める課題として、次の点が考えられた。第一に、自発性の発揮という観点から、仲の良い友だちと一緒に遊ぶ中で、自分の思いを出せること、第二に、既述した7つの観点の中の「大人の関わり方」について、保育者と一緒に遊ぶ楽しさをさらに感じる必要があること。

第一について、仲間関係ができて仲の良い友だちと一緒に何かをすることは、3歳児にとって大切である。しかし、保育カンファレンスを通して、次のような意見を得ることができた。確かに憧れの友だちと何かを一緒にするという楽しさもあるが、一緒に遊んでいる中で、リーダー的な存在（A児）である友だちに

ブレーキをかけられたようになると、上記のエピソードのように、「夢中度」が高まるのが抑えられてしまうこともある。そのため、S児が好きな遊びの中で自分を出し、表現できるように、保育者がS児の遊びの中に入り、思いを受け止めたりS児らしさを認めていったりすることが重要である。

第二について、上記のエピソードの数日前、同じく部屋でクリスマスの雰囲気で行われた日があったが、その日、保育者がS児に一对一で関わって遊んでいた際には、S児には豊かな表情や笑顔が見られた。この点を考えると、まだS児は、友だちとのかわりの中ではありのままの自分を出せないでおり、保育者とのつながりを拠り所にしていくことが分かる。そのため、保育者は、遊びに対するアドバイスをするだけでなく、遊びの一員になってS児と一緒に遊ぶことが必要である。そうすることで、S児は保育者に受け止めてもらえているという幼児同士とは違う安心感をもつことにつながり、S児なりの遊びへの「夢中度」も高くなることが期待できる。

### 5.3. S児理解の再構成と援助の工夫・改善

これら2つのエピソードから、S児の中で大好きなA児と一緒にいたい、遊びたいという思いが継続していることがわかった。また、S児とA児との関係を再度確認することもできた。S児は、リズム遊びや表現遊びを好み、これまでも、それらの遊びの中では自由に身体を動かし、自分なりの表現を楽しむことがあった。しかし、今回の場面において、S児が曲に合わせて、自分なりの表現を楽しもうとすると、リーダー的な存在であるA児から指示を受けたり、真似るように声をかけられたりして、S児らしさを発揮しようとしても、それが抑えられるといった状況が見られた。このような姿から、S児がA児についていこうとする時、S児の中にブレーキがかかり、遊びの「夢中度」が高まらない状況が生じているのではないかと考えられた。以上のことから、S児が友だちとのかわりの中でもありのままの自分を出し、遊びの「夢中度」が高まるようになるためには、以下の援助が必要であると考えた。

第一に、保育者がS児の遊びと一緒に入ることで、S児が自分の思いを話したくなったり、何らかの方法で自分らしさを表現したくなったりするような状況をつくることである。そして、S児が、自分を出して楽しかったという経験を積み重ねていけるように、保育者がS児を受け止めていくことである。それがS児の自信や自分を出すことの喜びにつながると考える。

第二に、S児が、自分の身の回りの素材や道具など

に自分から繰り返しかかわっていくことができるような場の構成や援助を行っていくことである。気の合う友だちと一緒にあっても、S児が自分のやり方や自分なりの動きを出しながら遊べるように支えていくことが大切である。

第三に、気の合う友だちと同じイメージや場、ものなど、友だちとの共通点をS児がもてるようなきっかけ作りをしていくことである。その中で伸び伸びと思いが出せるようにS児の好きなことや遊びを引き出して、認めていくことが大切であると考えた。

## 6. おわりに

以上のように、本研究では、S児の遊びの様子をビデオカメラで撮影し、映像データと「手引き」を用いた保育カンファレンスを通して、彼女の「夢中度」を探ることで、遊びの質を高めるための保育者の援助について検討した。以下では、本研究が明らかにした保育者の援助について整理するとともに、幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの可能性と課題について検討する。

### 6.1. S児の遊びの質を高める保育者の援助

入園当初のS児には、「じっとすることができない」「母親とのコミュニケーションがうまく図れていない」「落ち着きがない」などの状況が見受けられた。4～5月頃になると、「保育者を真似て遊ぶ」「保育者との一对一のかかわりでは笑顔を見せる」などの側面が見られるようになったものの、緊張した表情を見せることも多く、「安心度」が低いことが伺えた。

しかし、本研究の分析対象である12月以降は、幼稚園生活にも慣れ、「安心度」も高くなっており、A児や数名の女児と遊ぶ姿が頻繁に見受けられた。特に、リーダー的な存在であるA児は、S児にとって憧れの対象でもあるのだが、保育者は、状況によっては、A児のリーダーシップがS児の遊びの質の低下をもたらす場合があることを懸念していた。このことから、A児を含む仲間関係の発展を支えながらも、他方では、S児自身の自発的な遊びの質を高めることが保育者には求められていた。以下、本研究を通して保育者が明らかにした、課題と援助の方途を示す。

1) S児の遊びの質を高めるための保育者の課題として、(1) S児が「自分がやりたい」という思いをもって遊びに取り組むことができるように援助すること、(2) 友だちと一緒に遊ぶ中で、自分の思いを表現できるように援助すること、(3) 保育者と一緒に遊ぶ楽しさをさらに感じるように援助すること、の3点が明示された。

2) 上記の課題に対する保育者の援助として、S児の興味に目を向けながら、自らやりたい遊びに向かうことのできる環境を構成するとともに、保育者も一緒に遊ぶことで、遊びの楽しさや面白さを共有することの重要性が示唆された。

3) また、S児のつぶやきや表情を注意深く観察し、「保育者自身が思ったことを素直に表現して返す」「S児自身が自分の思いを話したくなったり、何らかの方法で自分らしさを表現したくなったりできるような状況をつくる」など、相互のコミュニケーションを重視することの重要性が示唆された。

4) さらに、S児が自分の身の回りの素材や道具に繰り返しかかわることができるような場を構成すること、友だちと共通点を持てるような契機をつくり出すこと的重要性が示唆された。

## 6.2. 幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの可能性と課題

以下では、保育者・研究者・大学院生の間で行った、幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの可能性と課題について検討する。

本研究で実施した保育カンファレンスは、園の同僚間で行う通常のものとは異なり、研究者・大学院生が対象児を観察し、エピソードの抽出を通して、保育者と共に検討したものである。従って、保育者にとっては、自分が見ることのできない場面が議論の対象であり、それが映像で提示されることから、幼児理解の再構成が促されることが多かった。

他方、観察する研究者・大学院生は、保育の実践者とは異なるため、従来であれば、対象児の観察からエピソードを抽出し、保育カンファレンスの組上に載せることは容易ではない。何を観察し、何をエピソードとして抽出すればよいのか、その視点の形成が難しいのである。しかし、本研究では、「夢中度」という観点が具体的に与えられたことで、観察者にとっても観察の視点が明確になり、対象児の姿から内面を読み取ったり、エピソードを抽出した理由を自分自身で言語化したりすることが促された。

また、保育カンファレンスでは、(1) 抽出されたエピソードとその映像をもとに、全員で対象児の「夢中度」を評定し、その理由を語り合う、(2) 対象児の「夢中度」がより高くなるための視点について検討する、という議論を行った。これによって、参加者同士で対象児の解釈を重層的に積み重ねた幼児理解が形成されるとともに、「対象児の「夢中度」を高めるには？」という焦点化された議論が可能となった。

その一方で、本研究で実施した保育カンファレンス

については、幾つかの課題も示された。第一に、本研究では、抽出したエピソードをもとに対象児の「夢中度」を評定し、援助の在り方を考えることから、エピソードの如何によって、対象児の課題や援助の方向性に関する議論の内容が変わる可能性がある。但し、これについては、どのエピソードを抽出しても、この点を免れることはできないのであり、従って、個々の参加者が自覚的になることが重要である。

第二に、本研究では、既述した4段階の過程を一つのサイクルと位置付けた。しかしながら、前のサイクルが次のサイクルにどのように活かされたのか（活かされなかったのか）、この点について、必ずしも十分に描き出すことができなかった。

第三に、保育者・研究者・大学院生の間で行われた保育カンファレンスは、保育経験の有無にかかわらず、参加者がそれぞれの視点から、相互に対象児を解釈することで、重層的な議論を可能にする。しかしながら、対象児の背景や日常の様子を理解している保育者と、第三者としての研究者・大学院生では、対象児についての情報はもちろん、実践者としての保育の見方や幼児の解釈なども大きく異なることから、第三者の側が議論の中で受け身的立場になる場面も幾つか散見された。第三者の側も、抽出したエピソードについて詳細に読み解き、言語化することで、保育者との生産的な対話が可能になるとと思われる。

## 引用文献

- 秋田喜代美・小田豊・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子 2008『保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究』厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業 平成19年度総括研究報告書
- 秋田喜代美・小田豊・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子 2009『保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究』厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業 平成20年度総括研究報告書
- 広島大学附属幼稚園 2009『幼児教育研究紀要』第31巻 7-11頁
- Laevers, F. 2005 "Well-being and Involvement in Care: A Process-Oriented Self-Evaluation Instrument for Care Setting" Kind & Gezin and Research Centre for Experimental Education.
- 文部科学省 2008a『幼稚園教育要領』フレーベル館
- 文部科学省 2008b『幼稚園教育要領解説』フレーベル館